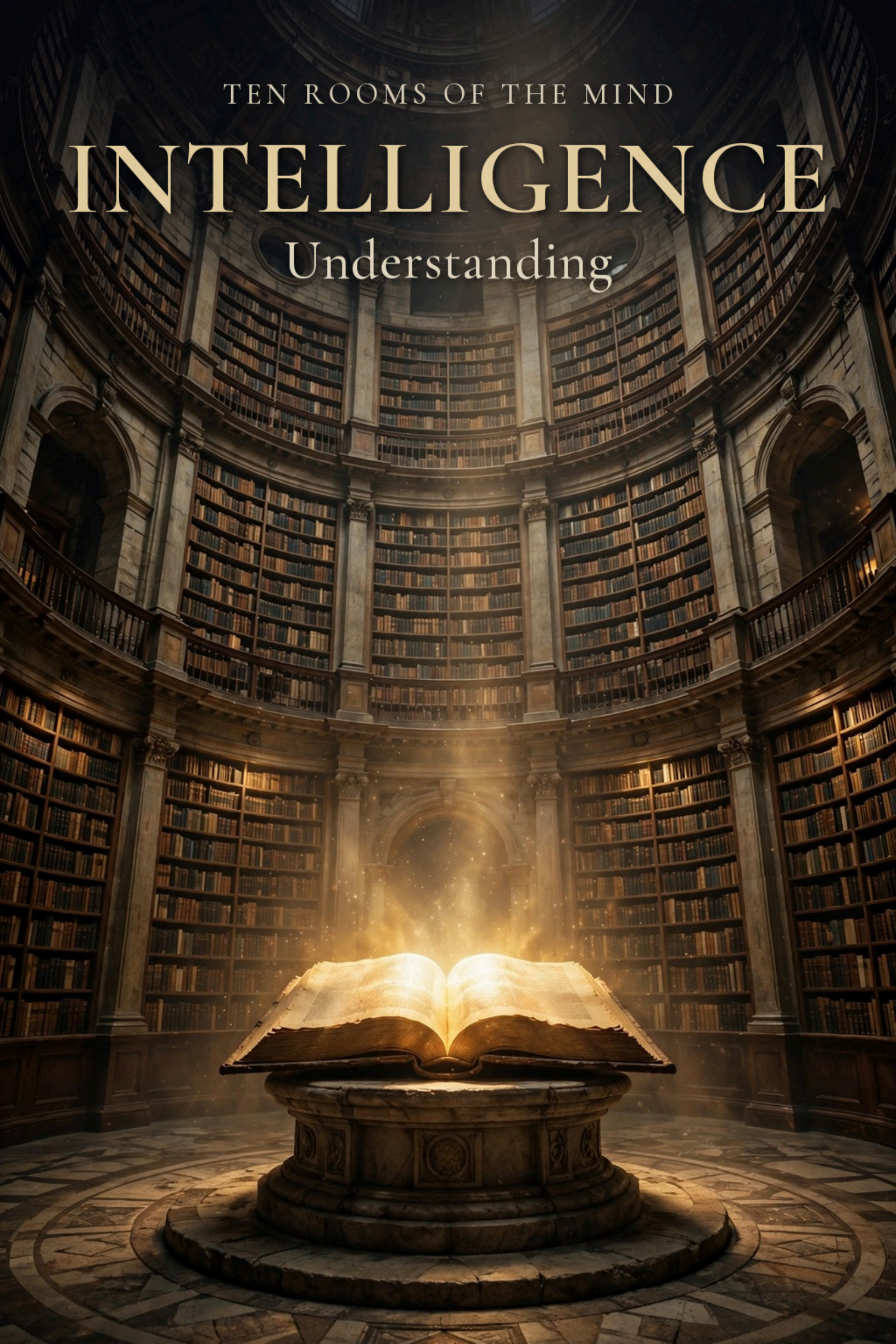


TEN ROOMS OF THE MIND

INTELLIGENCE

Understanding



Gilletteの知性

理解

心の十の部屋

誰もが、自分で選んだわけでもないのに住んでいる家がある。

住所はない。どの地図にも載っていない。それでも、実際に暮らしたどんな場所よりもよく知っている。なかには十の扉がある。

気づかないまま、毎日開けている扉もある。

自分には関係ないというふりをして、鍵をかけたままの扉もある。

そして、自分で建てたわけではないのに、なぜか内に抱えている部屋もある。これは理論ではない。

棚でほこりをかぶっている心理学の手引書でもない。

この十の部屋をひとつずつ、たいていは自分がどこにいるのかも知らずに通り抜け、いま、肩にいくらか歳月を重ねて、体験したとおりに描こうとしている一人の男の記録だ。

十の扉。

私はすべて開けた。

好奇心から開けたものもある。

しぶしぶ開けたものもある。

もう引き返せなくなってから、ようやく開けたものもある。

これらの部屋に見覚えがあるとしたら、それが私の物語を語っているからではない。

どこか深いところで、あなたの物語をも語っているからだ。

フェルディナンド

知性 — 理解

若いころ、知性とは答えの問題だと信じていた。

時とともに、それは問いの側にあるのだと知った。

何でも知っている教養ある男たちに会った。

そして、何でもわかっている素朴な男たちにも。

その差は途方もなかった。

前者は蓄えた。

後者は理解した。

本物の知性は踏みこまない。

観察する。

裁くのを急がない。

待つ。

閉じた扉よりも、開いた窓に似ている。

小さな細部でそれとわかる。

決して急がない。

現実はずっといつも、私たちの意見より複雑だと知っているからだ。

そして本当に知的な人は、決して自分が上だとは思わない。

好奇心を感じる。

どんな確信もありそめだと知っている。

どんな真実も陰影を含んでいる。

そして理解することは、話すことよりずっと難しい。

やがて誰かが、知性は商売になると気づいた。

測られた。

分類された。

包装された。

売られた。

テストと、数字と、ランキングが現れた。

まるで精神がひとつの点数に還元できるかのように。

まるで知性が質問票のなかに住んでいるかのように。

今日では多くの人が、あなたは知的だと言ってもらうために金を払う。

繁盛している市場だ。

だが、そんなお墨付きを必要とすること自体が、すでにひとつの省察を促すはずだ—あのテストが決して尋ねることのない、最初の本物の問いを。

フェルディナンド